アイスブレーキング(4)

毛利　邦彦*1
MOURI Kunihiko

今回はゴルフ英語について，紹介します。このアイスブレーキングは大学での講義や，就職説明会で使うのですが，困ったことは学生はゴルフをしないので，余り「良い受け」は期待できません。

1990年頃私は米国の深南部地方の南ミシシッピー大学に1年間ほど米国のビジネスとマネージメントについて留学しました。何もない田舎町で，午後3時の授業終了後は手持ち無沙汰で困っていた所，大学の付属のゴルフコースがあると聞き，100ドルでコースの会員となりました。会員になるとプレイ費は1.5ドルと格安です。雨の日以外は毎日の様にゴルフ場に通いましたが，会社にはエクササイズに行っていると報告していました。

さて，ゴルフのプレイには日本の様に4人で予約をするのではなく，当日チェックインをした順番（walk－in方式）でプレイするので，当然現地の人と一緒にプレイすることになります。

そこで，一緒にプレイをしながら，日本でよく使われるゴルフ用語が通じるか，また違うのであれば英語（米語）では何と言うのかを「聞きまくり」ました。

最初に紹介するのは「ダフル」です。英語の辞書には「ダフル」はありませんが。「Duffer」で下手のゴルファーとありますが，定かではありません。ダブルは英語では「fat shot」と言い，土を厚く取ったショットそのままを表現します。「トップ」は「thin shot」となります。

それではボールを池に入れるのを「池ポチャ」と言い，林に入れるのは「キンコンカン」といいますが，英語では「water trouble」[tree trouble] と言います。このように英語は見たままの現象を素直に表しますが，日本語は多分に心理的な要素を加えた擬音的な表現が多々あります。

さて，ホールに入る（入(はい)れ）は英語では「in the hole」と言います。米国ツアーでのTV放送で良くギャラリーが叫んでいるので聞いた方も多いと思いますが，それではホールをかすめて入らなかった時，日本では「おしい」と言いますが，英語ではなんと言うのでしょうか。これは学校教育で教えてもらっていて，良く知っている単語ですが，なかなか出てきません。「almost」と言います。「close」ではありません。良くこの言葉は使いますので覚えていた方が良いです。例えばボールが自分の近くに飛んできた時に体には当たらないが近くを取りすぎたとき「誰かが当たりましたか？」と聞くと「almost」と答え，当りはしないが，かすめた感じが良く出ています。

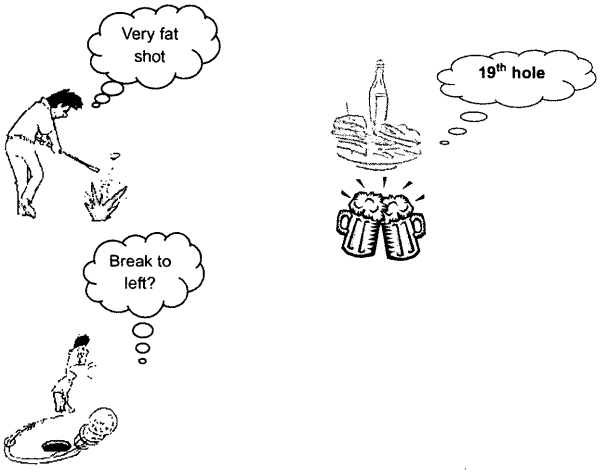
日本語と英語での文化の違いを感じたのはパットの表現です。グリーン上でスライスライン（右曲がり），フックライン（左曲がり）を私たちは良く使いますが，英語は「break to the right」[break to the left] と言います。それではグリーンが速いとかグリーンが遅いと良く使いますがこれは何と言うのでしょうか。私はこの事を一緒にプレイした現地の人に聞きましたが，「グリーンが速い」らしき言葉はなく，「あなたが強く打ったから」つまり「too much」がその回答でした。確かにスタート前にグリーンの状態は確認出来る筈ですので，後は自己管理・自己責任でパットをすべきであり，「グリーンの所為」にしてはいけないと思いました。

この文化の違いについてを大学での集中講義や講演会でアイスブレーキングとして，時々使用しますが，中高年では好評でしたが，学生には余り受けませんでした。

このようにゴルフの用語を一つ一つ取り上げてみると，そこには何か文化の違いが出ていて楽しくなって来ました。

蛇足ながら，日本人が間違えているゴルフ英語聞き慣れないゴルフ英語の例について，英語と日本語の意味を併記しておきますので，外国でのプレイ，または外国人とのプレイをする時にお使い下さい。

「19th hole：レストラン」「chip in：ノーズロ」
「pop up：てんぷら」「hit the green：ナイスオン」
「tee box：ティーグランド」「Good ball(Good shot)：ナイスショット」「frange：グリーンのカラー」



原稿受付　2003年10月31日
＊1　㈱八戸インテリジェントプラザ　科学技術コーディネーター
〒039-2245　青森県八戸市北インター工業団地1-4-43

Download service for the GTSJ member of ID , via 126.141.102.194, 2024/06/08.